

機関番号：14302

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19730487

研究課題名（和文） 新教育の思想の領有に関する比較教育文化史的研究

研究課題名（英文） The Comparative and Intellectual-historical Study on the Appropriation of a New Educational Theory

研究代表者

岡部 美香 (OKABE MIKA)

京都教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：80294776

研究成果の概要（和文）：

本研究は、20世紀初頭に生起・展開した新教育の思想を対象として、さまざまな社会集団によるその領有の仕方を比較教育文化史的に考察したものである。この考察を通して、新教育の思想は概して、(1)（時代を問わず）現行の教育を批判・改善する手がかり、(2)20世紀の教育文化を批判する手がかり、(3)近代教育の思想的枠組みを批判する手がかり、として読まれる傾向にあることが明らかとなった。また、教育実践者は(1)か(2)、教育学研究者は(3)か(2)の文脈で読むことが多い。今日、(1)～(3)の読みが同時並行的に実践されているが、(1)と(3)の間では内容的にも読者（集団）間でも対話的な交流があまり見られない。(1)と(3)のこのズレにいかに対応するかが今後の教育思想史研究の課題だといえよう。

研究成果の概要（英文）：

This study examines how the new educational theory, developed in the early 20th century, has been appropriated by various social groups. This examination, conducted from a comparative and intellectual-historical perspective, clarifies the general trend for the new educational theory to be interpreted in three ways: (1) as a key to criticizing and improving existing education (regardless of era), (2) as a key to criticizing education and culture in the 20th century and (3) as a key to criticizing the philosophical framework of modern education. In many cases, education practitioners interpret the theory in the context of (1) or (2), while educational researchers interpret it in the context of (3) or (2). Although all three interpretations are being employed concurrently today, little interactive exchange occurs between (1) and (3) in terms of context or readers (groups). The issue of how to treat this divergence between (1) and (3) is a topic for future research on the history of educational theory.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	0	500,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
年度			
総計	2,100,000	480,000	2,580,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：新教育、領有、文化史、教育史、エレン・ケイ、『児童の世紀』、解釈学

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究に関する国内外の研究動向

20世紀初頭を中心に国際的に生起・展開した新教育の思想は、子どもの教育をめぐる今日的な議論や実践において、直接・間接の参照対象として今も重要視されている。ただし、その場合、歴史的な文脈に対する十分な配慮を欠いたまま、恣意的に解釈・援用されることが少なくない。

国内外の先行研究は、その一因が研究者以外の一般読者による「誤読」や「一面的な理解」にあると見なし、テキストの批判的研究を通して、新教育の思想の精確な読解と歴史的・社会的な位置づけに関する考察、そしてその成果の公表に力を注いできた。

これに対し、本研究では、一般読者による読解を「誤読」や「一面的な理解」ではなく、より積極的にテキストの領有として捉える。領有とは、フランスの歴史学研究者 R. シャルチュエに即せば、個人あるいは社会集団がテキストを、ただ著者の意図にしたがってそのまま受容するのではなく、彼ら固有の世界観、社会観、人間観などに規定されたプラティック（実際的な行為）を通じて「自らのもの」にすることを意味する。この時、彼らは、自らの社会的アイデンティティを構築・保持すべく、しばしば著者の意図や研究者による精確な読解を侵犯し、覆し、新たな意味を創出するとされる。

新教育の思想に関する先行研究には、国内外を問わず多くの蓄積があるが、一般読者によるテキストの領有に焦点を当てたものはほとんどない。

(2) 着想に至った経緯

本研究の代表者はこれまで、新教育の思想を対象とした思想史研究を進めてきた。まず、新教育の先駆として知られる E. ケイの教育思想の内実を、テキストの批判的分析を通して、社会的・思想的文脈に位置づけつつ考察した。これらの研究から、新教育の子ども中心主義の思想と優生学との関連を具体的に解明するという課題が導出された。

この課題の解明は、2001年度より2年間、科研費の援助を受けて進められた（奨励研究(A)・若手研究(B) 研究課題「子ども中心主義の教育思想と優生学との関連性に関する比較教育史的研究」 課題番号 13710163)。その結果、「自律性」という概念が両者を関連

づける結節環として機能していることが明らかになった。

2003年度より3年間は、「自律性」の意味内容を教育思想史的観点から再考するという課題に、同じく科研費の援助のもとで取り組んだ（若手研究(B) 研究課題「近代教育学における〈自律性〉概念の成立と展開に関する歴史的・教育人間学的研究」 課題番号 15730360)。この研究を通して、「自律性」が時代や社会階層、また同じ階層内の諸集団によって異なる意味に解釈されているという事実が判明した。

また、これら一連の研究と並行して、スウェーデン・ドイツ・日本における E. ケイの教育思想の受容状況に関する社会史的研究も行っており、ここでも、時代や社会、階層、階層内の諸集団によって思想の受容の仕方に異なる特徴のあることが示された。

これらの研究成果を継続・発展させるためには、子どもと教育に関する知である新教育の思想を領有し、多様に意味づけることによって、さまざまな社会集団に属する読者たちがいかなる緊張関係を構成していたか、すなわち新教育の思想という知の歴史的・社会的布置を明らかにすることが必要であると考えられた。

2. 研究の目的

本研究は、20世紀初頭の新教育の思想を対象とし、さまざまな社会集団によるその領有の仕方について考察する。これを通して、思想の読者（集団）が構成する多様かつ多元的な社会構造、そこに出現する緊張関係、そして新教育の思想の社会的な布置を、歴史的・国際的な文脈に位置づけつつ解明する。これは、新教育の思想から創出され得る意味の多様性と多元性を開示するとともに、これまで等閑に付されてきた問題性、すなわち思想の読者（集団）によって生み出される社会的・政治的問題性を指摘するのに必要不可欠な作業だと考えられる。

この目的は、次の3つの具体的課題を順次明らかにし、それらの成果を比較・総合することによって遂行される。

- (1) 日本における新教育の思想の領有に関する考察・・・新教育の先駆として知られる E. ケイの著書『児童の世紀』（1900）について、日本におけるその領有のあり方を考察

する。

- (2) スウェーデンにおける新教育の思想の領有に関する考察・・・E.ケイの本国スウェーデンについて、(1)と同様の考察を行う。
- (3) ドイツにおける新教育の思想の領有に関する考察・・・『児童の世紀』を最も積極的に受容したといわれるドイツについて(1)と同様の考察を行う。

3. 研究の方法

本研究では、比較教育文化史的アプローチを採用する。文化史的アプローチとは、上述のR.シャルチエが1980年代半ばにアナル学派の社会史的アプローチを批判的に継承して提唱した研究方法である。この方法を用いた歴史研究は、日本ではまだ緒に就いたばかりである。一方、フランスやアメリカ合衆国などでは著書や論文がいくつかに公刊されているが、管見の限り、教育を対象としたものはほとんど見られない。

方法論について、本研究の代表者が従来行ってきた研究は、2つの点で限定的であった。一つは、教育思想の読者として著名な思想家や教育実践家のみを抽出し考察対象としていた点である。もう一つは、政治・経済史において定説化している社会階層論に基づいて、「エリート／民衆」という二項対立関係をア・プリオリに前提としていた点である。

本研究では、この限界を乗り越えるためにも文化史的アプローチを用いる。すなわち、思想史のアプローチ（テキストの批判的分析）、社会史的アプローチ（書物に関する量的分析）に加えて、一般読者によるテキストの解釈と援用に関するプラティック（実際的な行為）の分析に取り組む。この取り組みを通して、同時代の同階層に属していても、性や世代や教育履歴などの違いによって異なる社会集団が形成され、それぞれの集団間に緊張をはらむ関係構造が構成されていた実態を解明することができる。また、国内外の先行研究において定説化している「エリート／民衆」という二項対立図式に囚われることなく、新教育の思想の歴史的・社会的布置をより具体的に考察することが可能になる。

4. 研究成果

本研究は、「3. 研究の方法」でも述べたように、従来、新教育の先駆として教育史上に位置づけられてきたE.ケイ著『児童の世紀』（1900）について、(1)思想史のアプローチ（テキストの批判的分析）、(2)社会史のアプローチ（書物に関する量的分析）、(3)文化史的アプローチ（読者によるテキストの解釈と援用に関するプラティックの分析）による考察から構成されている。それぞれのアプロ

ーチによる成果を以下に述べていこう。

(1) 思想史のアプローチ

まず、『児童の世紀』の批判的分析を通して、このテキストが次の3つの特徴を併せもつことを明らかにした。

- ① このテキストは、当時の学校教育と家庭教育とを批判するために書かれたものである。
- ② 当時の学校教育と家庭教育を批判するために、このテキストでは、同時代の社会思想（ニーチェの文化批判、社会主義、優生思想など）を援用している。
- ③ このテキストでは、ルソー、フレイベルらの近代教育思想もまた、当時の学校教育と家庭教育を評価し批判する手がかりとして援用している。

こうした特徴を有する『児童の世紀』は、近代教育が発見した「子どもの自律性」を理論的かつ実証的に生まれる前の子どもにまで適用しようと試みる、極めて近代的な思考の枠組みに規定された教育思想を展開している。

(2) 社会史のアプローチ

次に、『児童の世紀』が著者ケイの本国スウェーデン、最も熱心に受容したといわれるドイツ、そして日本でどのように受け入れられたのか、翻訳本の構成や出版数・重版数などから考察した。

- ① スウェーデンでは、1900年に出版された初版本には教育実践者や教育学研究者の関心がほとんど向けられなかった。その後、3版を重ねるだけで一度、絶版になっている。戦後、教育史上重要な教育思想の古典として再版されるようになっている。
- ② 一方、ドイツであるが、スウェーデンの国内事情が書かれている部分が削除された1902年刊行の独訳初版は、「子どもへのまなざしを新たに開く著作」として、ドイツ新教育運動の実践者・理論家に積極的に受容された。ただし、同時代の社会思想を浅薄にしか解釈しておらず学術書としての体裁を成していない点などは、当時から厳しく批判されていた。1930年代以降は重版されなくなるが、戦後は、ドイツ新教育に対する省察や近代教育への批判的考察の手がかりとして、教育関係者に広く求められる傾向にある。2000年前後には、『児童の世紀』出版100年を記念するシンポジウムがドイツ各地で行われたことを機に、このテキストへの関心が高まった。
- ③ 日本に『児童の世紀』が初めて紹介されたのは1906(明治39)年のことだが、

当初は断片的な翻訳に止まっており、さほど高い関心も向けられなかった。独訳書から翻訳した英訳書を原本とする日本語訳が登場したのは1916（大正5）年のことである。この時、大正自由教育運動（日本の新教育運動）と婦人運動の関係者のなかには、『児童の世紀』の熱心な読者が少なからず存在した。1930年代以降、戦争の影響から出版されなくなるが、戦後には、教育史上の重要な著作として再版されるようになる。1979年には、スウェーデン語の原典からの翻訳書が刊行され、それは今も家庭教育の担い手（母親）、教育学研究者によって読まれている。

(3) 文化史的アプローチ

最後に、スウェーデン、ドイツ、日本においてどのような読者集団が『児童の世紀』をどのように読み、解釈したのかを分析した。

- ① 20世紀初頭はまだ農業国であったスウェーデンでは、急進的なケイの教育思想・女性思想が受け容れられなかったが、戦後、社会が工業化するにつれて主に母親たちから児童文化論・家庭教育論として読まれる傾向が強くなった。しかしながら、1990年代に入ると、今日にも通じる学校教育論・家庭教育論として読まれることは少なくなり、『児童の世紀』はたいていの場合、20世紀の教育を振り返り省察するための手がかりとして援用されている。
- ② ドイツでは、1902年から1920年代にかけて、現今の学校教育・家庭教育を批判しその改善を図る教育書として多くの教育実践者に読まれていたが、戦後はもっぱら20世紀の教育、とりわけ新教育の政治的な脆弱さを指摘し省察するための手がかりとして、また1990年代以降は近代教育の思想的枠組みを批判的に考察する手がかりとして、教育学研究者による研究対象となっている。
- ③ 日本では、1916年～1920年代にかけて、ドイツと同じく、現今の学校教育・家庭教育を批判しその改善を図る教育書として多くの教育実践者に読まれていた。戦後直後は、新教育を復興させる手がかりとして教育学研究者らによって再版されたが、1950年代に入り、新教育の脆弱さが指摘されるようになり、実践者からも研究者からもほとんど関心が向けられなくなった。ところが、『児童の世紀』刊行から100年を経過した2000年前後に、このテキストを今日にも通じる家庭教育論として読む教育実践者（母親）が散見されるようになり、これと時を同じくして、20世紀

の教育を批判する手がかり、あるいは近代教育を省察する手がかりとして教育学研究者たちの関心も集めるようになった。

(4) まとめ

(1)から(3)の考察を通して、新教育の思想は、①（時代を問わず）現行の教育を批判・改善する手がかり、②20世紀の教育文化を批判する手がかり、③近代教育の思想的枠組みを批判する手がかり、として読まれる傾向にあることが明らかとなった。また、歴史的に見て、教育実践者は①か②、教育学研究者は③か②の文脈で読むことが多いといえる。今日の日本においては、①～③の読みが同時並行的に実践されているが、①と③の間では内容的にも読者（集団）間でも対話的な交流があまり見られない。①と③のこのズレにいかに対応するかが今後の教育思想史研究の課題だといえるだろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 岡部美香、教育思想の解釈をめぐる戦略・戦術と倫理、『近代教育フォーラム』（教育思想史学会誌）、第19号、pp. 103-116、2010年、査読有。
- ② 岡部美香、教育思想史研究における文化史の可能性、『近代教育フォーラム』（教育思想史学会誌）、第16号、pp. 129-136、2007年、査読無。

〔学会発表〕（計3件）

- ① 岡部美香、Outlook on and Transformation of Educational Anthropological Studies in Postwar Japan、ソウル国際教育哲学会議、2010年6月12日、高麗大学（韓国・ソウル）。
- ② 岡部美香、教育思想の読み／解釈における戦略・戦術と倫理、教育思想史学会第19回大会、2009年9月13日、大阪大学コンベンションセンター。

〔図書〕（計2件）

- ① 岡部美香（他5名、掲載順1番目）、子どもと教育の未来を考える、北樹出版、2009年、pp. 12-23 および pp. 46-55。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡部 美香 (OKABE MIKA)

京都教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：80294776